

読者の広場

ISTC/SAC 議長が行く

ーカザフスタン編（その2）ー

日本原子力研究開発機構

深堀 智生

fukahori.tokio@jaea.go.jp

1. つづきのはじめに

前回[1]からの続きで、国際科学技術センター（ISTC）の科学諮問委員会（SAC）議長として訪れたカザフスタンについて紹介させていただく。前回、ISTC の紹介から書いていたら、紙面が尽きてしまったため、個別の都市については言及できなかったが、今回は、旧首都のアルマティや現首都のアスタナについて紹介したい。

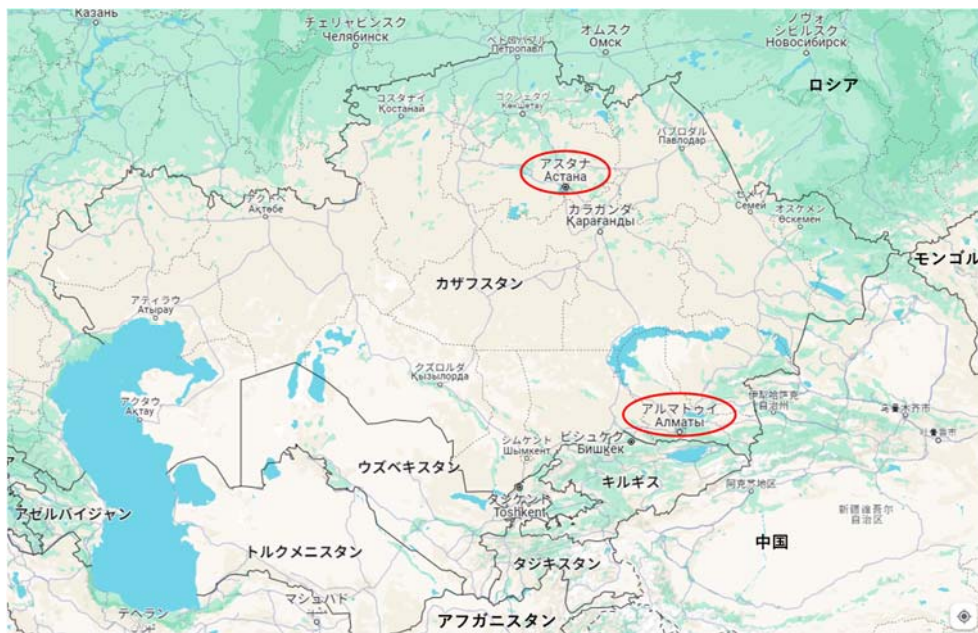


図1 カザフスタンと周辺の地図（©Google Map）

2. 旧首都アルマティ

2016年5月、ISTC/SAC議長に就任して、初めて赴いたカザフスタンの都市がアルマティであった。図1に示す通りアルマティはカザフスタンの南東部にあり、天山山脈からキルギスタンを通っての雪解け水等があり、山脈に近い湿潤な気候であるので、ワインなども作られている(図2)。当時、SAC会議はアルマティの中心部にある **Rahat Palace** ホテルで開催されるのが常であった(図3左)。かなり格式の高いホテルで、広い庭にはカザフスタンの伝統的な住まいであるユルトを模した東屋が設けられている(図3右)。もともと、モンゴル同様遊牧民族であるカザフスタンでは、ユルトをモデルにした建物も多い。ユルトは、モンゴルの「ゲル」(日本では、中国語の呼び名に由来するパオ(包))という名前で呼ばれることも多い)と同様に、しなやかな梁を巡らせその周りにヒツジの毛皮などで作るフェルトをかぶせてテントのような形にした移動式住居である。



図2 アルマティの街並みから望むカザフスタン南東山間部



図3 Rahat Palace ホテル

アルマティには地下鉄があり、中心部の主要な場所を結んでいる（図4）。1号線と書いてあるが、2、3号線はまだ計画中となっていると思う。1号線の総延長は11.3 kmで、9つの駅を持つ。そのうち4つは地下深く、3つは地表付近に位置する。これは、モスクワと同様に旧ソビエト時代に核シェルターとしても利用するためだったかもしれない。

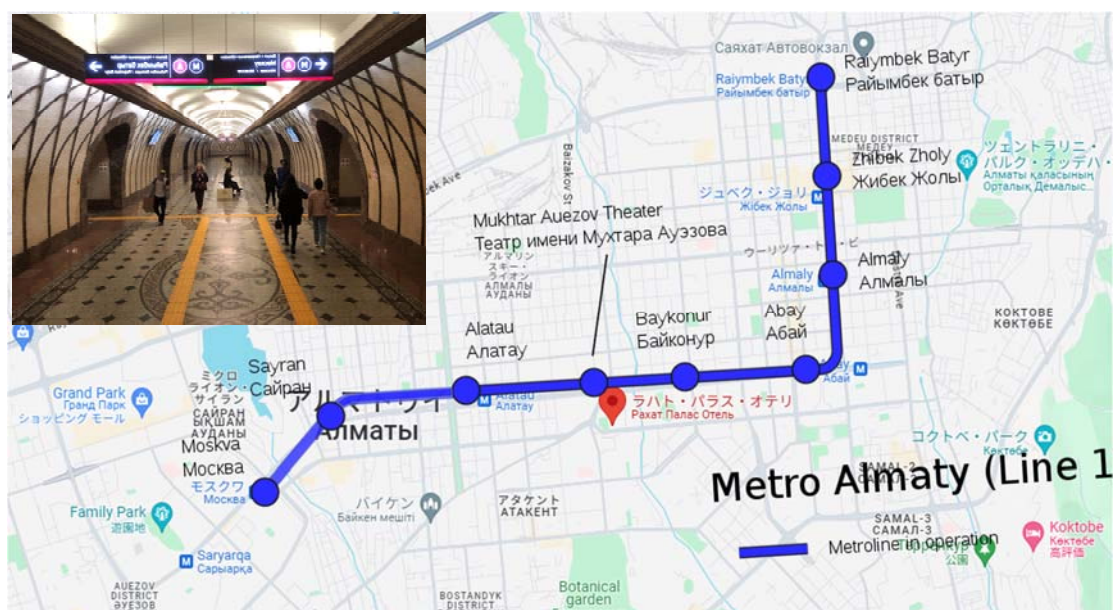


図4 アルマティの地下鉄

車両は韓国製らしい。駅内は、劇的なソビエト時代の雰囲気と独立後のデザインや建築様式が溶け込んでいるのが特徴である。ステンドグラスやモザイクの床、手の込んだシャンデリアなどで駅が飾られている。1号線のちょうど真ん中に、上述の Rahat Palace ホテルがある。駅近くにショッピングモールがあり、それなりに便利である。

3. 新首都アスタナ

カザフスタン北東部にある新首都アスタナ（図5）は、砂漠にこつ然と現れた都市のようで、似ている都市といえば米国のラスベガスである。ただし、カジノは見かけない。1997年12月アルマティよりアクモラに遷都し、翌年カザフ語で「首都」を意味するアスタナに改称、さらに2019年3月にヌルスルタンに改称されたが、2022年9月再度アスタナに改称し、現在に至る。日本は国際協力機構（JICA）による都市計画作成を支援し、基本設計は故黒川紀章氏が担当した。ちなみに、ヌルスルタンはソ連崩壊後の初代大統領、ヌルスルタン・ナザルバエフ氏にちなむ。この名前を冠したナザルバエフ大学（2009年創立、初代学長は勝茂夫氏）もアスタナにあり、授業をすべて英語で行っている。ISTC本部は大学の比較的近くにある（図6）。

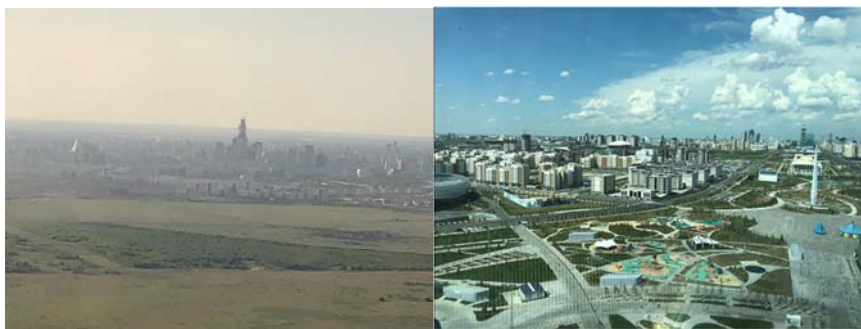


図5 アスタナの全容



図6 ISTC 本部の入るビル（左）とナザルバエフ大学（右）

ナザルバエフ大学の近くには 2017 年の EXPO（ISTC も協賛）のシンボルであるヌールアラム未来エネルギー博物館もある（図 7）。ここは、様々な未来エネルギーを啓蒙・教育するための展示を行っている。8 フロアから構成され、旅は最上階から始まり、未来のアスタナ、宇宙エネルギー、太陽エネルギー、風力エネルギー、バイオマスエネルギー、運動エネルギー、水力エネルギー、そして球体の基部にある国立パビリオンという独自のコンセプトが反映されている。カフェが併設されていて、ここのビールは「カザフスタンプルスナー」とも呼ぶべき清涼な味がした。

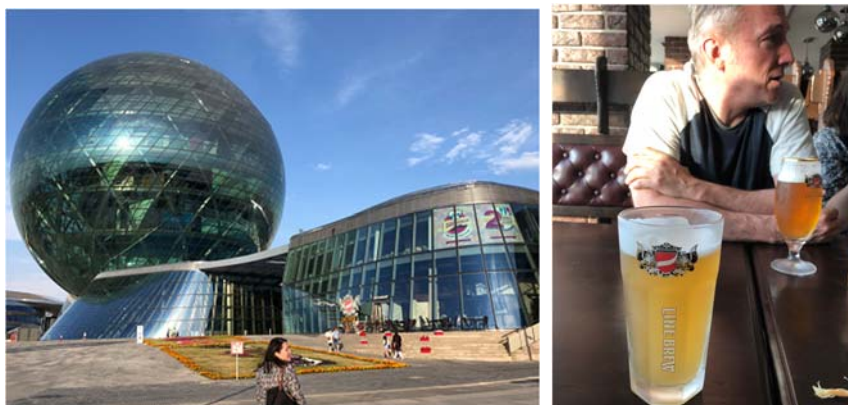


図7 ヌールアラム未来エネルギー博物館（左）と併設するカフェのビール

最後に都市中央部をほぼ東西に貫く約 3 km のメインストリートを紹介する (図 8)。一番東にあるアコルダ (大統領官邸、図 8(a)) から 1 km 程西へ移動すると観光客に人気のモニュメント兼展望塔バイテレク (カザフ語で「高いポプラの木」の意味) がある (図 8(c))。1997 年にアスタナが首都となって以来首都の象徴となっている。モニュメントは幸福を呼ぶ魔法の鳥 (サムルグ) と神話的な生命の樹に関する民話を具象化したものである。その鳥はポプラの木の 2 つの枝の間に卵を置く。頂上付近の卵の部分まで登ることができる。ここにはナザルバエフ大統領の手形が展示されていて、これと自分の手を合わせるのが定番であるようだ。筆者もミーハー精神を炸裂させて、やってみた (図 8(d))。この近くのレストランでは、前回説明した小籠包と餃子の中間のような料理 (図 8(b)) を食べることができる。もちろんビールには最高に合う。一番西の端には、カーン・シャティールというまるでタジン鍋のような形をした巨大ショッピングモールがある (図 8(e))。内部は地下駐車場を除いて、4 層からなり、一番上にはジュラシックパークをモデルにした、恐竜公園 (遊技場?) が、設置されている (図 8(f))。ここは、恐竜もそうであるが、いわゆる日本のゲームセンターがあり、子供や若い人たちに人気の施設のようなのである。

なんとなく屋内施設ばかり紹介してしまったが、アスタナの冬はホワイトアウトしてしまう程のブリザードが吹くため、このような施設が多いのではないかと推察している。幸いなことに筆者は真冬のアスタナは訪れたことがない。順番が逆になってしまった感があるが、首都アスタナの主要部は南北 15 km、東西 20 km 程の環状高速道路の内側にある。その半分ほどの開発済み地域を持つ比較的コンパクトな都市である。ここに、首都機能をギュッと押しこめているので、役所といろいろ議論したい ISTC にとっては便利がいいと思われる。国際空港は環状高速道路のすぐ外側にある。まだ地下鉄はないし、空き地もふんだんにあるので、今後の発展が楽しみであるが、こういう時期 (時代?) に何度も訪れることができたのは、良い経験になったと思う。

4. おわりに

前回、紙面 (読者の広場は 5 ページ程度だそうである) について言及したが、2 都市を紹介するだけで、この制約を超えてしまった。ここにお詫びする。ご存じのようにカザフスタンは有望な地下資源大国であり、今後の発展が期待できる。それだけに、科学技術を基礎とした、若者の育成に力を入れているので、今後、多くの方が訪れることになるであろう国である。そういう方々に少しでも生の情報をお伝えできたら幸甚である。

参考文献

- [1] 深堀智生:「ISTC/SAC 議長が行くーカザフスタン編ー」、核データニュース No.138, 46-50 (2024).

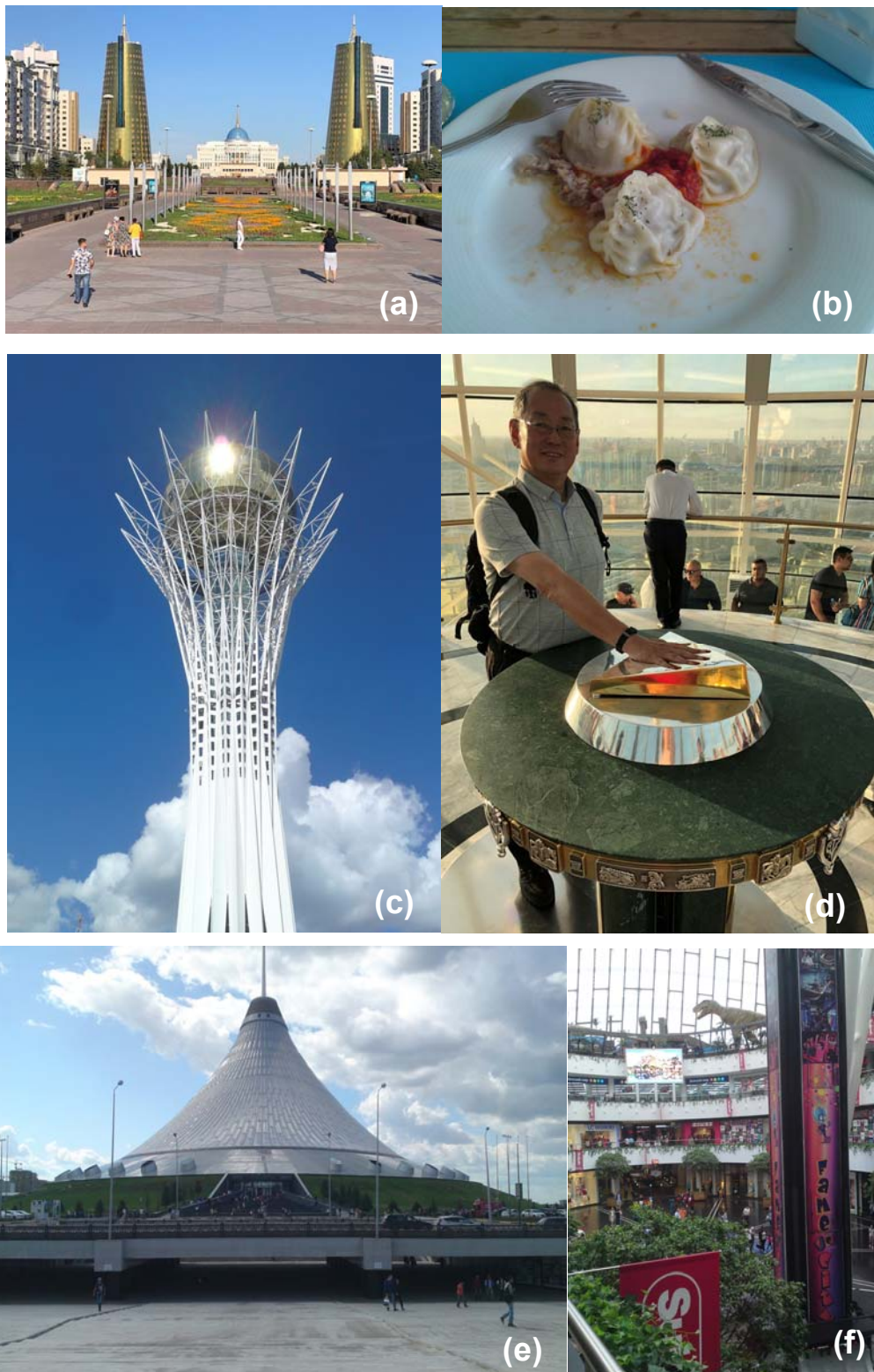


図8 アスタナ・メインストリートの観光